

G.R.E.S SAÚDE 2025浅草サンバカーニバル

Sinopse(あらすじ)

「いのちはめぐる」

～思いきり食べて、思いきり出そう!

40年分のいのちを受け継ぎ、未来へ向けて噴き出そう!～

— O arco oculto na cadeia alimentar —

Somos a Biosfera do Samba,

Damos presentes para o futuro!!

1. 忙しいひとのための、90秒で読めるバージョン

食べることはキモチイイ!

出すこともキモチイイ!

いのちは生き延びるために食べて、出す

そのつながりが輪になり網となり、調和が生まれる

私たちがふだん目にしないところで、命の輪がつながっている

マンゲイラから運ばれてきたサンバの種子が

横浜の地に根付いた

私たちはその木の周りに集い、サンバからいのちをもらい、サンバにいのちを返す

毎年、花が咲き、実をつける それは一瞬のことだが、消化されて次の年の糧となる

私たちはサンバの滋養を糧に、快感と共に音や踊りをまきちらす

懸命に生きて、やがて木の根元に倒れる

それが次のいのちの栄養となる

横浜の地に、先人が遺したサンバの土壌が積み重なった

その土壌に根を張り、サンバの木はますます豊かに茂りゆく

誰もがその周りに集い、サンバの滋味を味わい、音やダンスとして排泄する

それらが土にかえり、次の世代を生み出し、新たな仲間を引き寄せる

サンバの木のまわりで、毎年いのちがめぐる

いのちをもらい、受け渡しながら、生き物たちは懸命に生きる

そのすがたは、私たちそのものである

いのちを受け継ぎ、放出し、次の仲間へのいのちを伝えていく

サンバの木のもとに集った仲間が織りなす生態系＝バイオスフィアこそが、

私たちサウーヂである

これからもますます増殖し、サンバの土壌を肥やし、サンバの木を生き茂らせていく

私たちは快感と共に、思い切り食べ、思い切り出す

サンバのいのちを取り入れ、浅草の街で放出する

街の人々、観衆の皆様へ、その音や彩り、味を感じてほしい

40年分のいのちを受け継ぎ、未来へ向けて噴き出そう

2. 味わって読みたいひとのための、9分で読めるバージョン

(1) 「いのちはめぐる」ってどういうこと?どんなことをやるの?

サウーヂが2025年の浅草サンバカーニバルに向けてお届けするのは「いのちはめぐる」という物語です。私たちの身近にいる生き物たちは、いつも食べたり食べられたりしています。小さなものが大きなものの餌となります。相手のいのちをもらわなければ、自分は生きていきません。私たち人間のご先祖たちも、かつては狩る側であり、狩られる側でもありました。

それぞれが自分のために、またつがいの相手や、巣でえさを待っている子供たちのために、懸命に獲物をさがし、そのいのちを奪い、むくろを捕食することで、自分と仲間のいのちをつなぎました。そこには、追うものと追われるものの、切迫した生きざまがあります。真剣な命のやり取りにもかかわらず、ある種の滑稽さも感じられます。お互いに生きることによって、周りに目もくれずに突き進む様子が、そんなふうにも見えるのでしょう。そして手に入れた他者のいのちを、自分の体に取り込む「たべる」という行為にともなう、言い尽くせぬよろこびと快感があります。

いのちを奪い、食べることで自分のいのちを永らえる。個々の生き物がやっていることは、たいへん独善的な行為です。自分が生きてい。そのためには他者を食べたい。だから食べることによるこびや快感を感じる。あらゆる生き物は、そのようにプログラミングされています。

ところが、数えきれないほどの種類の生き物が、お互いに食べ、食べられる輪となり、網となつてつながっている様子を見るとどうでしょう。そこには調和のとれた生態系が現れてくるのです。それぞれの生き物は、自分が今日を生き延びるために、また子孫を残して種として存続するために、なりふりかまわず独善的にふるまっています。ところが、全体としてみると、そこには勝者も敗者もありません。いのちを一方向的に奪うだけの存在はありえず、強きものもまた、弱きものの糧となっているのです。

どんなに強大な生き物も、からだに取り入れたものを選び分けて、外部に排出しなければ体内のバランスが保たれません。それがうんこです。うんこをしない生き物はいません。植物だって、光合成で生きる糧を得るときに必ず出てしまう、余分な物質である酸素を、体外にうんことして放出しています。植物のうんこ(あるいはおなら)が私たち陸上動物のいのちの源です。私たち生き物は、たえず食べつづけるとともに、たえずうんこを出し続けなければ、生きていけないのです。排泄という行為もまた、いのちの根源です。だからこそ快感に満ちているのです。

生き物がうんこを出し続けられれば、地球はうんこであふれてしまうのでは?そのようなことになっていないのは、うんこを食べる生き物たちがいるからです。うんこには、未消化の食べ物や、腸内の細菌、古くなった細胞などが含まれています。それらを餌とする生き物にとっては、うんこはたいへんなごちそうといえるのです。

うんこは、ハエやフンコロガシなどの昆虫類、ネズミやタヌキなどの哺乳類によって、食べられます。残ったうんこは、うんこ本体や土の中にいる菌類によって、細かく食べられていきます。カビやキノコが表面を覆い、うんこを消化していきます。ミミズがそれらの塊を食べ、ふたたびうんことして出します。ミミズが出したうんこは、もはや一般に「土」と呼ばれるものになっています。

それらの生き物は、誰も目もくれないようなちっぽけな存在です。小さすぎて目に見えないということもありますが、多くの人は、何となく目をそむけて、見ないようにしているのではないのでしょうか。なんだか地味だし、臭いし汚らしい。できれば関わり合いになりたくない。生き物たちのサイクルの中で、うんこを食べて土に戻すという、とりわけ大事な部分を担っているにもかかわらず、ふだんは無視された存在です。

しかし、それらの生き物たちも、うんこを前にして、私たちと同じように、食べる喜びを感じているのではないのでしょうか。天から降ってきた巨大なうんこは、量といい味といい、思わず歓声を上げるほどのごちそうに違いありません。思い切りかぶりついて、今日も生きることができるという充実感に満たされるのではないのでしょうか。

それら、つねには目に留めないような存在も、近づいてみればそれぞれに珍しい色や形を持っています。つやつやと光る肌や、鮮やかな水玉、フラクタルにどこまでも細かく枝分かれする菌系のアラベスク模様…。私たちと同じ生き物とは思えないくらい様々な姿かたちをしています。それぞれの動きも、ふだん目にする生き物たちとは違いますが、様々に個性的で、引き込まれる魅力を持っています。

ふだん見ていない、あるいは見ないようにしている、小さな、ひそやかな暗がりにも、数えきれないほどのいのちが満ちています。それらもまた、私たちと同じように、与えられたいのちを、けんめいに燃やしています。みずからの生きざまを追求し、必死に生きながら、生きる喜びを味わっています。彼らもまた、この地球という閉じた系の中でいとなまれる、いのちのサイクルにつらなる仲間です。

私たち地球上の生き物は、ひとつひとつの存在が輪のようにつらなり、無数の目を持つ網となって、食べたり出したりしながら、お互いを生かしあっています。生きるために自分の体から排出したのも、やはりいのちの塊であり、そこに宿るたくさんのいのちは、他の生き物の糧となって、つながっていきます。そうして網の目はつねに更新され、循環の輪は保たれていきます。これこそが生態系です。

まさに今、絶妙な調和を保つ生態系が、広い宇宙の中で、ここに存在しています。今この瞬間、私たちは、この地球に住むすべての生き物とつながっているのです。このように想像してみると、私たちのものの見方や、食べ方、出し方が、今までとは違って感じられるのではないのでしょうか。目に見えない小さなものに、私たちのいのちが支えられています。食べることは、大

きな網からいのちを取り出し、あずかる行為です。出すことは大きな網にいのちを返し、戻していく行為です。

私たちサウーヂは、生き物たちが、気持ちよく食べ、気持ちよく出し、滑稽に、しかし懸命に生きる姿を愛します。生き物たちの姿をまとい、浅草で命のドラマを演じます。とりわけ、小さいもの、目を向けずにいるものが、いのちのめぐりの中で欠かせない一部を担い、地球の生態系を支え、私たちのいのちを支えていることを、明らかにします。一つ一つの生き物が、食べる生き物のいのちを余すところなく使い、自らの血肉とし、また次の生き物に食べられることで、いのちを受け渡して行く様子を描きます。いのちの大いなる循環が織りなす、奇跡のバランスを讃えます。

(2) 私たちが「いのちはめぐる」にとりくむわけは？そして浅草の皆様へ

私たちのエスコラ・ヂ・サンバ・サウーヂは、今年40周年を迎えます。その昔ブラジルから、サンバの種子を日本にもたらし、植え付け、育ててきた先人たちがいました。ジャズと大道芸人の街、横浜・野毛に根付いたサンバの木は、年を重ねるたびに大きく太くなり、たくさんの花や実をつけています。その姿は、リオデジャネイロの丘にそびえる、偉大なる先達であるエスタサオン・プリメイラ・ヂ・マンゲイラの姿に似ています。

たくさんの人々が、このサンバの木陰に集っています。マンゲイラから伝わったサンバの木が茂らせた、滋養あふれる葉や実にかじりついて、味わっています。サンバの栄養を体に取り入れた私たちは、歌い、踊り、叩きます。それは、快感と共に放出するうんこであり、次のいのちに向けてサンバの栄養を伝える、贈り物です。

サンバの木は夏を迎えるたびに、花を咲かせ、実をつけます。毎年浅草サンバカーニバルで、派手にお祭り騒ぎを演じている私たちのようです。夏が終わると、木は花や実や枯葉を落とします。しかし、それらは生き物たちの糧となり、分解されて土に変わります。そして木を太らせる栄養となり、また次の年に、一回り大きな花や実をつけるのです。毎年の祭りで咲かせた花や実は、一瞬にして消えてしまうものではありませんが、木の周りに生きる者たちによって消化され、再生して、新たな年に向けた栄養分になっているのです。

サンバの木の周りに集う者たちが、木がもたらす滋味を食べ、太ります。そして周りに音やダンスといった形で、栄養のあるうんこを放出します。時には木の根元に倒れて朽ち果てます。それらは木の根元に堆積し、日本で、横浜で、次のサンバをはぐくむ豊かな土壌になります。その土の味わい、先人たちが遺したサンバの香りにひかれて、また新たな者たちがやってきます。こうして毎年、木の周りに集まる者たちは少しずつ変わりますが、それぞれが発した音や踊り、サンバを愛し懸命に生きたその姿や生き様は、失われることはありません。姿を変えて木の根元に積み重なる土壌となり、サンバの木を豊かに茂らせるのです。

サンバの木は、常に中心にあります。私たちはその周りに集い、夏が巡りくるたび、いのちの饗宴を繰り広げます。サンバの木からいのちの力を受け取り、音やダンスに変えて放出します。作り上げたものはたちまちに消えますが、分解して次の年にまた姿を変えて、さらに豊かに再生します。それをまた、木の周りに集う次の者たちが消化し、新たな踊りや歌を浅草に響かせるのです。

私たちの先人たちは、その年その年を懸命に生きて、自分たちの目指すサンバを表現してきました。自分たちが思い切り生きて楽しみながら、音やダンスを放つ。放ったうんこはいのちの塊であり、次世代にサンバをつなぐ贈り物です。たくさんの仲間たちが放ってきたうんこの塊は分解されて、豊かな土壌になっています。その中心にそびえるサンバの木は、ますます幹を太らせ葉を伸ばし、マンゲイラの丘にある姿とよく似た、大きな木陰を作っています。

その木陰に、たくさんのいのちが集い、時を経て積み重なっていきます。そのいのちがおりなす生態系＝バイオスフィアが、私たちサウーヂの姿です。

私たちサウーヂという生態系が、これまで積み上げてきたサンバの土壌から、美味しい栄養を体に取り込みます。そうして8月の太陽の下、浅草の街で思い切り放出します。そこにはマンゲイラから、先人から受け継いだ、サンバの味と香りがこもっています。毎年サンバを暖かく迎えてくれる浅草の街の方々、灼熱の下、沿道で声援を送ってくださる観衆の皆様、どうか私たちが放ついのちの塊を、思い切り浴びてください。踊り手が舞い、太鼓が響き、いのちの讃歌が街に満ちわたります。そこに込めた喜びと感謝を、吸いこみ味わっていただくことが、私たちの願いです。

創立40年の記念に。今まで集ってきた仲間たちのエネルギーを受け継ぎ、未来に向けて新たな糧となるように。サウーヂは壮大ないのちの塊となって、噴き出します。かぶりついて味わってください！

2025 Carnaval Asakusa
G.R.E.S Saúde
40º Aniversário de Fundação